

平和文化



2018.3 No.197



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成30年(2018年)3月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

ノーベル平和賞授賞式への出席

ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)のノーベル平和賞授賞式への出席等を目的として、昨年十二月八日から十二日までの五日間の日程で、松井一實広島市長(平和首長会議会長)が、ノルウェー・オスロ市を訪問しました。

ノーベル平和賞授賞式

授賞式は十二月十日、松井市長や田上富久長崎市長を含め、招待された約千人が参列し、厳粛に執り行われました。各国から集まったICANの主要メンバーや、被爆者、核兵器禁止条約の推進国の政府代表たちが見守る中で、ICANのベアトリス・フィン事務局長は、核兵器を世の中に定着したものととして受け入れていることは異常とし、今まで核戦争が回避できたのは単に運が良かったからに過ぎないと指摘しました。その上で「核兵器は私たちが決して安全にはしない」と核抑止に頼る安全保障を否定し、人類の終わりではなく核兵器の終わりを選択することは理性的な選択であるとし、全ての国が核兵器禁止条約に参加すべきだと訴えました。



被爆者のサーロー節子氏(右から2人目)等と共に

また、広島で被爆したサーロー節子氏は、自身の被爆体験を語り、「核兵器は必要悪ではなく絶対悪であり、核兵器禁止条約を核兵器の終わりの始まりにしよう」と力強く呼び掛けました。途中、何度も大きな拍手が沸き起こり、終了後は会場の全員が立ち上がり、受賞者に敬意を表していました。

今回の授賞式は、核兵器のない世界の実現が平和な世界の実現に欠かせないものであるということを世界の人々に訴え、それに向けて協働を呼び掛ける絶好の機会となりました。

各国政府関係者との面会

授賞式の前後に、松井市長は、核兵器禁止条約交渉会議の議長国を務めたコスタリカのゴンザレス外務大臣及びホワイト大使を始め、交渉会議での議論をリードしたメキシコのビデガライ外務大臣及び二人の大使、オーストリア、アイルランドといった条約推進国の大使等とお会いし、意見交換の場を持ちました。松井市長からは、核保有国と非保有国の為政者が、対立の立場ではなく、平和な未来の追求という同じ目標に向けて何をすべきなのか考え、対話することが大事であり、平和首長会議としては、そうした為政者のリーダーシップを促すような市民社会の機運醸成を図って、環境づくりをしていきたいと伝え、その推進力拡大のために、各国内における加盟都市拡大に対する協力を依頼しました。お会いした方々からは、国家を超えて市民社会が取り組んでいく意義について力強い賛同をいただきました。

その他の行事への出席

十二月九日(土)、オスロ大学植物園において、二十人余りの広島・長崎の被爆者たちが見守る中、ヨ

目次

ノーベル平和賞授賞式への出席	1	ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言／ハンガリー等でのヒロシマ・ナガサキ原爆展／被爆体験伝承者等派遣事業	9
ノーベル平和センターへの被爆資料貸出／「ICANのベアトリス・フィン事務局長と語る:平和な世界の実現に向けて」	2	県外・国外在住被爆者証言ビデオ収録／被爆体験記執筆補助	10
「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」初めて実施	3	本館下から発掘された資料の展示／第22回平和記念資料館展示検討会議	11
追悼平和祈念館平成30年企画展「星は見ている 全滅した一中一年生・父母の手記集」	4	資料調査研究会研究発表会／資料調査研究会研究報告第13号発行／海外からの来訪者が発信するメッセージ	12~13
被爆体験記「私の被爆体験記」(大田金次)	5	JICAサロン「フータン」東ティモール／姉妹・友好都市の日(重慶、ホノルル)	14
平和首長会議加盟都市との連携強化のためロシア・スイス訪問	6	国際フェスタ2017	15
オバマ財団サミットへの出席	7	ヒロシマ・メッセンジャー決定／「ひろしま留学生基金」にご協力を／資料館全館オープン延期について	16
平和首長会議事務局が海外からインターンを受入れ	7		
国連軍縮フェロウズの受入れ／第14回広島市民平和友好訪中団	8		

ハンセン オスロ市事務総長、ストールン オスロ大学長、松井市長及び田上長崎市長が、広島で被爆したナツメ、エノキ、クロガネモチ及びイチチョウから採取した種を鉢に植えました。松井市長は、種が平和の象徴としてオスロの地に根付き、その成長とともに核兵器廃絶に向けた機運が高まり、平和への思いが広く、長く共有されることを願うと伝えました。

また、松井市長はノーベル平和センターにおいて、平和賞に関する展示を見学しました。ここでは、ICANのノーベル平和賞受賞に関するものとして、広島・長崎で原爆の犠牲になられた方々の遺品が一年間展示されることになっています。これらの遺品は核兵器の非人道性を静かに、しかし強いメッセージ

性を持って訴えるもので、展示会場に多くの人が訪れ、核兵器廃絶の必要性を確信して平和首長会議と協働する人が増えるきっかけになることが期待されています。

出張を通じて

今回の出張で、核兵器のない世界の実現に向けて、市民社会の果たす役割の大きさ、また市民社会が世界を動かしていく可能性を改めて実感しました。

核兵器廃絶は一朝一夕に成し遂げられるものではなく、核軍縮についても進展が期待しにくい現下の状況はありますが、今回、非核保有国の有志と市民社会が協力して、核兵器を明確に違法化する核兵器禁止条約の採択に貢献した国際的な運動にノーベル平和賞が贈られた意義

は大きく、更に取組を進めていくという勇氣と活力を得られた方は多いと感じました。授賞式に出席した方のみならず、それを報道等で見てもICANの受賞を祝うパレードに集まった多くの人々は、同じ志を持つ同志として連帯意識を強め、核保有国とその核の傘の下にある国に届くよう、市民社会の声を更に大きくしていく契機となりました。

引き続き、核保有国等の為政者が核抑止という幻想から脱却する後押しをする環境づくりを進めるため、被爆の実相と核兵器の非人道性をより多くの人に広めるとともに、平和首長会議の加盟都市数を増やし、国際世論の醸成における影響力を高めていきたいと考えています。

(平和連帯推進課)

ノーベル平和センターへの被爆資料の貸出

ノルウェー・オスロにあるノーベル平和センターでは、平成二十九年十二月から平成三十年十一月まで、平成二十九年にノーベル平和賞を受賞したICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)に関する

る展示が行われています。

展示では、ICANの活動の歴史のほか、広島・長崎の原爆被害について展示されています。この展示資料として、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、立命館大学国際平和ミュージアムから被爆資料を貸し出しました。

広島平和記念資料館から貸し出した資料は、建物疎開作

業現場で被爆し、行方不明となった十三歳の舛田幸利さんの「かばん」と「防空頭巾」です。父親が市内を駆け回って幸利さんを捜しましたが、遺体すら見つからず、八月七日に近所の人が届けてくれた幸利さんの「防空頭巾」が入った「かばん」が遺品となりました。

(平和記念資料館 学芸課)

若者との対話集会「ノーベル平和賞受賞団体ICANのベアトリス・フィン事務局長と語る・平和な世界の実現に向けて」の開催



原爆死没者慰霊碑に献花したフィン事務局長(左)と川崎国際運営委員

賞受賞団体ICANのベアトリス・フィン事務局長と語る…平和な世界の実現に向けて」と題した若者との対話集会で、基調講演や広島若者との意見交換を行いました。対話集会には約三百四十人の若者や市民が参加し、フィン事務局長と平和への思いを共有しました。

対話集会の第一部では、松井広島市長の開会挨拶に続いて、フィン事務局長が「We Shall Not Repeat the Evil: How Japan Can Lead us Towards a Nuclear Free World」と題した基調講演を行いました。フィン事務局長は、「核兵器の恐怖を目の当たりにし、その悲惨さを積極的に語り続けた被爆者なくして核兵器禁止条約は生まれなかった」と被爆者の活動を称えるとともに、「核兵器のもたらす結果をどの国よりも知っている日本こそが、核軍縮を先導すべきだ」と訴え、核兵器廃絶に向けての熱い思いを語りました。また、若者に対し、「希望、活力、ソーシャルメディアという自分たちの強みを活かして、思いを同じくする仲間と繋がって、より良い未来に向けて行動していったほしい」と語りかけました。

続く質疑応答の時間には、フィン事務局長へ多くの質問があり、活発なやりとりとなりました。



基調講演で若者達に語りかけるフィン事務局長

した。活動を続けていく中で困難な状況に陥ったとき、どのようにして希望を持ち続けているのか、その秘訣を尋ねられると、フィン事務局長は、「自分たちは正しいことをしていると信じ、常に前向きであることが大事だ」と述べ、前向きなエネルギーは周りの人を巻き込み、大きな変革に繋がると参加者を勇気づけました。

第二部では、広島市の四人の若者がそれぞれの平和活動を発表し、続いてその四人とフィン事務局長による対話が行われました。フィン事務局長は四人に、「『平和』はとても難しいテーマであり、進展がなかなか見えないため、モチベーションを持ち続けることは大変だが、野心を

もって小さな目標を立てることが重要だ」と語りました。同時に、「誰かがチャンスを与えてくれるのを待つのではなく、自らが進んでチャンスを見つけていければいけない」として、そのプロセスに楽しみを見出さなければいけない」と激励しました。また、SNSの活用や、核兵器禁止条約に背を向ける日本政府に政策を転換してもらうよう働き掛けることの重要性を助言し、エールを送りました。

今回の対話集会に参加した若者達にとって、被爆者の思いを受け止め、核兵器のない世界の実現に向けて何をすべきかをしっかりと考え行動している若いフィン事務局長の姿勢を目の当たりにしたことは、自らの



フィン事務局長から激励を受ける四人の若者

よくな行動が出来るのかを考えると貴重な機会になりました。

(平和連帯推進課)

「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」を初めて実施 —ヒロシマの心を世界へ—

広島市では、長崎市と共同で、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンの国連施設に、被爆資料や写真パネルなどで構成する常設の原爆展を開設しています。これらの施設には、核兵器のない平和な世界を実現する上で重要な役割を担う、各国政府や国際機関の指導者が数多く集まります。また、世界各地から多くの観光客も訪れます。そうした人々を対象に、国連施設では見学ツアーを実施しており、世界各地から年間約四十万人が参加しています。

国際政治や国際世論に大きな影響を及ぼす場所で開催している原爆展を通して、より効果的に被爆の実相を伝えるためには、案内役のガイドやガイドツアー担当職員に被爆の実相を共有していただくことが不可欠です。このため、平和記念資料館では、国連三施設の見学ツアーガイドとガイドツアー担当職員計六人

を広島に招聘し、被爆の実相を理解するための「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」を昨年十二月一日から四日までの四日間、初めて実施しました。

一 日目

研修冒頭、志賀賢治平和記念資料館長が「ガイドツアーを通して、核兵器に襲われた人間は何を奪われ、核兵器を使うことによって何がもたらされるのか、多くの人々に伝えていただきたい」と述べ、続けて被爆の実相の概要の講義を行いました。

午後には、ヒロシマピースボランティアの原田健一さんが案内役となり、平和記念公園内の慰霊碑や原爆ドーム内などを見学しました。その後、資料館



原爆ドーム内の視察

の展示を見学し、原爆の犠牲となった人々の遺品に接し、核兵器の非人道性を理解しました。

二 日目

研修受講者は集中的に講義を受けました。内容は、原爆の人体への影響（講師・広島大学 神谷研二副学長）、米国における原爆開発から投下までの経緯や外交上の思惑について（講師・大阪大学大学院 山田康博教授）、核兵器規制をめぐる国際情勢や国際条約の変遷（講師・広島市立大学広島平和研究所 福井康人准教授）、本財団の委嘱被爆体験証言者である寺本貴司氏の講話などです。

三 日目

午前、受講者はボランティアの八木朱實さんの案内の下、広島を見学し、広島市の歴史や日本の伝統・文化に触れました。その後、松井一實広島市長を表敬訪問しました。松井市長は、受講者に日頃の原爆展での案内に対する謝辞を述べ、「原爆が人々にもたらした痛みを十分理解いただき、核兵器の非人道性を、理論と感情の両面から共有していただきたい」と挨拶しました。

その後、放射線影響研究所を訪れ、所内を見学し、丹羽太真理事長から原爆放射線の健康影

響の調査・研究と、その社会的影響などについての講義を受けました。

四〇四目

最終日は、広島市立大学広島平和研究所のロバート・ジェイコブス教授が、米国における原爆投下の受け止め方について講義を行いました。続いて、本財団の委嘱被爆体験証言者である梶本淑子氏の講話を聴きました。午後には、国連訓練調査研究所広島事務所を訪問し、担当職員から被爆樹木などについての取組の説明を受けました。

最後に研修の総括として、振り返りのディスカッションを行いました。ここでは、研修で得た知識や経験を今後の職務にどう活かすかや、国連施設での見学ツアー参加者にどう還元するかについて、各受講者が意見交換しました。

受講者からは、研修の感想として「被爆の実相について、我々の根底にある認識や考え方を改めることができた」、「被爆体験講話は、研修の中で、最も記憶に残る部分だ。お二人とも、恐ろしい被爆体験やその後の人生について、とても鮮明に、詳細に語ってくださった。当時の惨状がよく伝わった」などといった声が寄せられました。

また、受講者の帰国後、各国連施設から、「核軍縮をテーマにしたツアーを開発したい」、「ツアーの視覚資料に原爆の絵を採り入れる」、「新たな展示を検討する」といった連絡があり、国連は、研修を通じて、核兵器の非人道性をより一層伝える必要性を再認識したものと考えています。

この研修は、今後も継続して実施する予定で、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、世界レベルで「ヒロシマの心」の発信力の強化を図ります。

(平和記念資料館 啓発課)

平成30年 追悼平和祈念館企画展

星は見ている

全滅した広島一中一年生・父母の手記集

期間 平成30年1月1日～12月29日
場所 追悼平和祈念館 地下1階
情報展示コーナー
入場 無料

原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相を伝えるため、毎年テーマを定めて企画展を開催し、被爆体験記を紹介しています。

本年は「星は見ている 全滅

『星は見ている』
全滅した広島一中一年生・父母の手記集
(発行：鱒書房/昭和29年(1954年)8月3日)



した広島一中一年生・父母の手記集」に収録された追悼記を中心に、書籍と同名の企画展を組み立てました。

広島県立広島第一中学校は、明治十年(一八七七年)に広島県中学校として創設され、有為な人材を数多く輩出する県内屈指の名門校として、少年たちの憧れの学び舎でした。

昭和二十年(一九四五年)四月に入學した一年生は、戦況が厳しさを増す中で、上級生と同様に学徒動員に駆り出されることになりました。

八月六日の朝は、一年生が集合し、点呼・作業上の注意を受けた後、奇数学級は市役所裏付近で建物疎開の後片付け、偶数学級は教室で待機中でした。爆心地から一キロメートル未満の至近距離で被爆し、屋外で作業

中だった生徒の一部は即死、大部分はやけど・重傷を負い、かろうじて帰宅した生徒も全員が死亡しました。また、全壊した校舎の下敷きになった生徒の多くも亡くなりました。

被爆の翌年、遺族会が結成され、昭和二十九年(一九五四年)には、父母などが執筆した追悼記が『追憶』として刊行されました。収録された手記は全国的な週刊誌に取り上げられ、大きな話題を呼び、同年八月には選定された追悼記を編さんした『星は見ている』が刊行されました。何度かの復刊を経て、現在も読み継がれる本書は、子を思う父母の思いが涙を誘い、平和を希求する心が読む者に強く訴えかけます。

本企画においては、被爆の悲惨さを伝える手記集を取り上げることで、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願う広島の人を訴える一助としたいと考えました。

展示の中心となる三面シアターでは、被爆死した七人の中学生の父母や姉らが書いた追悼記の中から、在りし日の子ども思い出や最期の様子をナレーションと原爆の絵などで映像化

しています。七人の追悼記の最後の締めくくりとなる、藤野としえさんがつづった「戦争はやめて欲しい、地球上からなくしてほしいと子供が語ったことを追憶してみました。十四歳の少年の言葉ではない。神の言葉だ」と思いました。博久も一緒に死んでいった一中のお友達も、みんな魂が天に昇り、星くずとなって、この地上に再びあのような惨禍が起きないようにと、静かに私たちを見つめているように思われてきました」との言葉が多く、来館者の感動を呼んでいます。

会場では、二十六編の手記とともに、被爆した学生服、当館の所蔵する一中教諭だった戸田五郎氏が被爆の状況を詳細につづった手帳などを展示しています。

企画展の映像については、過去に制作したのもも含め、当館の体験閲覧室やホームページで視聴することができます。映像は平和学習資料として、DVDでの貸出しも行う予定です。ご希望の方は当館までお問い合わせください。

【お問合わせ先】
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

☎(082)54336271



プロフィール
 [おおた かねじ]
 1939年生まれ。幼稚園児であった5歳の時、爆心地から900mの自宅で被爆。
 2015年から被爆体験証言者として活動。被爆の実相、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴えている。

被爆体験記

peace
私の被爆体験記

本財団被爆体験証言者
大田 金次

はじめに

広島に原子爆弾が投下されてから今年で七十三年目を迎えます。熱線と爆風により一瞬にして何万人もの命を奪い、その年の暮れまでにおよそ十四万人もの命を奪った原爆は、今に至るまで被爆者を放射線による後障害等で苦しめています。核兵器は人類史上最も凶悪な兵器であり、その廃絶は全人類の願いでもあります。このようなことが再び繰り返されることのないよう、日本は非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶と恒久平和の実現を訴え続けることが、今を生きる私達に課せられた責務だと思います。

毎年八月が近くなると原爆が投下された日の光景が思い出されますが、一方で危惧されるのは風化という言葉です。当時の「細かい」ことなどが年を重ねるごとに薄れ、あの時どうだったかな、と思うことが多くなっていることも事実です。

原爆の被害

一九四五年当時、私は五歳で、両親と三歳の弟の四人家族でした。我が家は爆心地から九百メートルの距離にありました。八月六日曜日朝から快晴で、私は幼稚園に行くため母の後ろについて玄関を出た瞬間でした。「ピカ」という閃光と爆風で、何秒か何分か気を失いました。母の呼ぶ声で気がつくと、家は壊れ、家族は全員、家

の下に掘ってあった防空壕に落ちていました。暗闇の中で互いに声を出し合い、手を取り合い、地上に出ると、全ての家が倒壊しており、道も分かりませんでした。

私達は家から三十メートル先の天満川へ、倒壊した家が重なり合った上を歩いて逃げました。やっとのことで雁木(船着場に続く階段)にたどり着くと、そこは黒く焼け焦げた人々で足の踏み場もありませんでした。五寸釘が目突き刺さり、顔が血だらけの人もいました。地上では倒れた建物から火が出てどんどん広がって行くので、私達は川へと降りました。途中、私は大やけどをした黒い手で足を掴まれ、「水をくれ、水をくれ」と、うめくような小さな声で訴えられてびくびくりしました。その人の皮膚は「ずるむけ」で、掴まれた足がずるりと抜けるような状態でした。父に「水をあげようか」と尋ねると、「水をあげると死んでしまうので、あげない方がよい」との返りでした。

川へ降りると、満潮を過ぎて間もなかったで、私は首まで水に浸かる状態でした。上流から黒く焼けた材木が流れてきたので、父が一本拾って川岸に立てかけ、また、流れてきた布団を材木の上にかけて、私達は布団の下に隠れて燃え盛る炎や夏の暑さから身を守りました。

被害者の苦しみ

引き潮になると、昔父が「何かあったら」と言葉の山奥に小さな家を建てていたので、そこへ避難しました。天満川、福島川、山手川を横切り、死体がいっぱい浮いている川を縫うように進みました。

山奥の家はしっかり建っていましたが、ガラスなどは破損し、野菜やサツマイモの葉の上にガラス片が散乱していました。その野菜を何とかして口にしましたが、段々と体は弱り、食べる物も無くなりました。父といっしょに町に出て食料を調達して戻りましたが、それも長くは続きませんでした。

母は熱線により前面上半身を中心にやけどを負い痛みをこらえていました。また、髪をとくと櫛に髪の毛がドッサと抜け、鏡を見ながら泣いていたのを覚えています。その後、続いて父、私、弟の順に髪の毛が抜け、家族全員が丸坊主になりました。家の周りに植えていたドクダミ草を手でもんで傷口に付けたり、お茶の葉にして飲みましたが、私達には効果はありませんでした。そして傷口からはウジがわき、両親が箸で一匹ずつ取ってくれた時の光景を思い出すと本当に悲しいことでした。

日が経つにつれ体力は無くなり、十一月か十二月頃、父親と私と弟は竹原の叔母の所へ、母は三原の叔母の所へ身を寄せることになりました。三か月位面倒を見てもらいましたが、そこには病院もあり、

食べる物も不自由なく、叔母家族からも大変長くしてもらい、今日命があるのは叔母達のお陰だと感謝しています。

その後、母と広島駅で再会し、子ども心に大変癒しかったことを覚えています。全員で山奥の家に帰り、元氣を取り戻しました。山から見ると市の中心部の様子は、見渡す限り焼け野原で、原爆ドーム、本川国民学校、原爆投下目標の相生橋などが残っているのが見えました。

市内の元の所に家を建てるため、父と私は毎日のように自宅の焼け跡の周囲で必死に材料を集め、私も手伝って一九四六年の三月か四月頃、黒い家ができました。ただ、昼夜となく我が家の近くで兵隊さんのような人が担架で黒い死体を運んで来て焼いていました。それは数えきれないほどの人数でした。また、そこから出る異臭は何とも言えず、その光景は残酷でした。

原爆への思い

私は原爆という非人間的な過ちを大きな声で叫び続けたい気持ちで一杯です。

あの苦しみや未来永劫語り継がれることを願い、また風化させないために次の世代の人々に語り続けることが最も大切なことだと思います。そうすれば、必ず世界恒久平和に届くものと確信いたします。

小溝事務総長が平和 首長会議加盟都市と の連携強化等のため ロシア・スイスを訪問

小溝泰義こまぐらやすよ平和首長会議事務総長（本財団理事長）が、昨年十月十四日から十月二十一日までの日程で、ロシア・ボルゴグラード市とスイス・ジュネーブ市を訪問し、ロシア国内における平和首長会議行動計画に沿った活動の推進について協議を行うとともに、ジュネーブ市で核軍縮に携わる要人と面会し、核兵器禁止条約の早期締結に向けて、平和首長会議加盟都市や関係団体との連携について意見交換を行いました。

ボルゴグラード州立大学訪問 （ロシア）

小溝事務総長はボルゴグラード州立大学を訪問し、被爆の実相や被爆者の核廃絶への願いを若い世代へ伝える「広島・長崎講座」を開設していただきたいと、タラカノフ学長へ紹介しました。学長は、「当大学は歴史を記憶に留め、次世代へつなぐ

授業を大切にしている」と述べ、検討に前向きな姿勢を示しました。

ボルゴグラード市長との面会 （ロシア）

平和首長会議の副会長都市であり、ロシアのリーダー都市でもあるボルゴグラード市のコンラポフ市長を訪ね、今後核廃絶を目標に互いに協力していきたいと伝えました。また、ロシアにおいて新しい加盟都市を増やすための協力を依頼しました。最後に、市長へ千羽鶴を手渡しました。



コソラポフ ボルゴグラード市長との面会

ジュネーブ市外交部長との面会 （スイス）

平和首長会議の加盟都市であるジュネーブ市のベルナル外務部長を訪ね、今後より一層、

平和首長会議の取組を推進していただくよう要望しました。

国連軍縮研究所（UNIDIR） 研究員との面会（スイス）

軍縮・不拡散に関する多様なデータや研究成果を提供するUNIDIRを訪問し、平和首長会議の取組を紹介するとともに関係強化を要請しました。

核兵器廃絶国際キャンペーン （ICAN）事務局長との面会 （スイス）

小溝事務総長は、ノーベル平和賞を受賞したICANのフィン事務局長を訪ね、今回の受賞に対する松井広島市長からのお祝いのメッセージと千羽鶴を手渡しました。

その後の協議の中で小溝事務総長は、次のステップとして、対話によって相互不信を払拭するための行動を続けていくことの重要性を訴えました。

フィン事務局長は、核兵器禁止条約採択後の新たな取組を構想中であり、また、現在のリスクに満ちた状況や市民社会による取組を、一般の人々にわかりやすく伝えていきたいと述べま

した。

赤十字国際委員会（ICRC） 武力関連法務部長との面会（ス イス）

この面会で、ローワン武力関連法務部長は、「核兵器禁止条約採択後の優先事項は、核保有国等との対話を通して、核兵器が使用されるリスクを減らしていくことである」と述べました。

小溝事務総長は、「核軍縮の実質的な進展のための賢人会議等の機会を積極的に活用していきたい」と伝えました。

国連欧州本部長との面会（ス イス）

小溝事務総長は、平和首長会議のリーダー都市がテロ、難民といったそれぞれの地域の諸問題に取り組みながら、包括的に危機に対応していくことを、国連のモラー欧州本部長に伝えました。

モラー欧州本部長は、核兵器禁止条約の採択やICANのノーベル平和賞受賞が流れを变える機会になると指摘し、平和首長会議の役割はより重要になっていくだろうと述べまし

た。

コスタリカ駐ジュネーブ国際機 関代表部大使との面会（スイス）

この面会で、コスタリカのホワイト大使は、「若い世代に対しては、被爆者の願いを伝えるための平和教育に加え、核兵器そのものに関する教育が重要である」と述べました。

小溝事務総長は、「二〇二〇年までに核兵器廃絶を軌道に乗せ、高齢化が進む被爆者に自信と安心を与えたい」と、決意を述べました。

国連難民高等弁務官事務所（U NHCRC）高等弁務官補との面 会（スイス）

小溝事務総長は、平和首長会議行動計画では、「核兵器のない世界の実現」に加えて「安全で活力のある都市の実現」という新しい目標を掲げ、難民問題も扱うことになったことをUNHCRのターク高等弁務官補に報告しました。

ターク高等弁務官補は、大規模な難民危機が生じた際に、UNHCRが平和首長会議の持つネットワークを活かすことが重

要だと述べました。

出張を通して

ボルゴグラード市への訪問では、第二次世界大戦におけるロシア最大の激戦地という歴史的背景を持つ同市は平和への意識が強く、リーダー都市として高い志を持って取り組んでいることを確認できました。

ジュネーブ市での各要人との面会は、「国際的な平和研究機関との連携強化」や「平和関係の国際組織やNGO等とのネットワークの構築」に繋がる貴重な機会となりました。また、ICANのフィン事務局長とコスタリカのホワイト大使との面会では、核兵器禁止条約採択後の取組について実り多い意見交換ができました。

(平和連帯推進課)

オバマ財団 サミットへの出席

平和首長会議事務局を務める当財団は、一昨年十二月以降、オバマ前米国大統領が設立した

オバマ財団の関係者との面会等を通じ、今後の連携について協議を続けており、両財団の連携の一環として、昨年十月三十一日及び十一月一日の二日間、米国イリノイ州シカゴ市で開催された「オバマ財団サミット」に、国際部平和連帯推進課の職員が出席しました。

このサミットは、様々な分野でリーダーとしての役割を担う米国及び世界六十か国の若者約五百人が、二十一世紀の活動的な市民のあり方などについて意見交換を行い、共通課題に対する解決策を考へることを通じて、国を超えた若いリーダーの人的ネットワークを構築することを目的として開催されました。また、英国のヘンリー王子やイタリアのレンツィ前首相を始めとした、地域社会、経済、芸術、文化など、多岐にわたる分野の著名人による講演や分科会が用意されていました。

出席した職員は、世界の若い市民リーダーとの意見交換を行うとともに、平和首長会議の取組について紹介し、今後の活動に対する理解と協力を求めました。また、広島から出席してい

(平和連帯推進課)



開会行事でのオバマ前米国大統領

国	都市名	人数	期間
ブラジル	サントス	1	H29.11. 6 ~11.21
ロシア	ボルゴグラード	1	H29.12. 4 ~12.20
イラン	テヘラン	1	H30. 1. 9 ~ 1.26
スペイン	グラノラース	1	H30. 2. 5 ~ 2.21

平和首長会議事務局が 海外からインターンを 受け入れました

平和首長会議では、平成二十六年度から、海外の加盟都市の若手職員等をインターンとして広島に招へいし、事務局の業務に従事してもらう取組を行っています。今年度は、四都市から四人をインターンとして受け入れました。

インターンには母国の加盟都市の情報更新や未加盟都市の調査・加盟要請のほか、メールマガジンの原稿作成など事務局の様々な業務を体験してもらいました。一方、インターンからも、事務局員に対し、自らの都市の平和の取組を紹介してもらい、相互理解と連携強化を促進する



広島や出身都市の青少年に対して、テヘラン市の平和の取組を紹介するインターン

ことができました。また、平和記念資料館、平和記念公園、原爆死者追悼平和祈念館及び放射線影響研究所の見学に加え、被爆体験講話の聴講、広島と出身都市とをウェブ会議システムでつないだ青少年との意見交換なども実施し、被爆の実相への理解を深め、平和への思いを共有してもらいました。

各インターンは帰国後、講演や青少年への平和教育を行うなど、広島で学んだことを基に核兵器廃絶に向けた活動を行っています。事務局では、このインターンシッププログラムを通じて、核兵器のない平和な世界の実現を願うヒロシマの心が世界に広まることを期待しています。

(平和連帯推進課)

国連軍縮フェローズの受け入れ

軍縮の専門家を育成する目的で国連が主催する「国連軍縮フェローシップ計画」の研修生（フェローズ）を、昨年十月三日（火）から三日間、広島に受け入れました。

国連軍縮フェローシップ計画は、国連が昭和五十四年（一九七九年）から実施している研修事業であり、昭和五十八年（一九八三年）から毎年広島で受け入れを行い、これまでに八百人以上が来広しています。今回は、二十五か国の若手外交官等二十七人が参加しました。

一行は三日（火）の広島到着後、歓迎レセプションに出席し、被爆体験証言者など地元参加者と交流を深めました。

四日（水）は、被爆体験証言を聴講するとともに、小溝本財団理事長から平和首長会議の核兵器廃絶に向けた取組などについて説明を受けました。また、広島市民から被爆の実相を伝える書籍や銅板で作った折り鶴の寄贈を受けました。さらに、平和記念資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、原爆ドーム等を見学するとともに、原爆死没者慰霊碑への献花を行いました。

五日（木）は、放射線影響研究所を訪れ、研究員から放射線が人体に与える影響について講義を受けました。同研究所へのフェローズ訪問は、昨年度に続き、今回で三回目です。一行はとても熱心に聴講し、講義後には多くの質問がありました。

一行からは、非常に有意義なプログラムであったという感想が寄せられました。被爆の実相について理解を深めていただき、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を真摯に願う被爆地の思いを共有することができた三日間でした。

（平和連帯推進課）



原爆ドームを見学するフェローズ一行

第十四回広島市民平和友好訪中団の派遣

中国人民平和軍縮協会（以下、平縮会という）は、平和及び軍縮を推進する中国の全国的組織です。

本財団と平縮会とは、昭和六十三年（一九八八年）に第一回広島市民平和友好訪中団一行が北京等を訪問して以来、二十九年間にわたり相互訪問を続けています。十四回目となる今回の訪中では、本財団評議員である放射線影響研究所の丹羽太實理事長を団長とする一行六

人が、昨年十一月十日から十一月十四日の日程で北京市、天津市及び上海市を訪問しました。主な用務は次のとおりです。

十一月十一日（土）

北京市で、北京展覽館「練磨と奮進の五年」大型成果展を視察し、二〇一二年からの五年間における習近平政権の成果について、理解を深めました。

十一月十二日（日）

天津市で、在日殉難烈士勞工記念館を訪問し、第二次世界大戦末期の中国人強制連行に関する展示を遺族と共に見学しました。

その後、天津市人民政府を表敬訪問し、平和首長会議への加盟を要請しました。

次に天津外国語大学へ移動し、日本語を学ぶ学生約三十人に対して、葉佐井博巳団員と瀬越睦彦団員が、日本語で被爆体験を証言し、続いて中国人強制連行の遺族も証言を行いました。

質疑応答の時間には、学生から日本の当時の生活状況や現在の原子力発電に関する質問がなされ、非常に有意義な交流会となりました。

（平和連帯推進課）

十一月十三日（月）

北京市で、中国人民抗日戦争記念館を視察しました。その後、平縮会の安月軍（An Yuejun）秘書長ほか関係者と日中関係に関する意見交換を行うとともに今後の両団体の交流について協議し、今後も未来志向で交流を継続し、相互理解を進めていくことで一致しました。



安月軍秘書長ほか平縮会関係者との協議

今回の訪中では、天津外国語大学の学生との交流会に、中国人強制連行の遺族も同席されました。日中双方の意見を学生が聴くことは相互理解を進める上で大変有効であり、今後もこの交流事業を継続していきたいと考えています。

（平和連帯推進課）

ウェブ会議システム による海外への被爆 体験証言

被爆の実相を世界に

平和記念資料館では、海外にも広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けての国際世論を醸成するため、インターネット回線で海外と広島を結び、被爆体験証言を行う「ウェブ会議システム」による海外への被爆体験証言」を実施しています。

今年度は八か国に対して十二回実施しました(平成三十年二月十九日現在)。また、平成二十七年から複数回聴講している都市に証言者が招聘されたり、証言を聴講した方が来日して平和記念式典に参列したりと、証言を通して継続的な交流を行うことができました。

当館は今後もウェブ会議システムなど様々なツール・媒体を活用して国内外へ被爆の実相を伝えていきます。
(平和記念資料館 啓発課)

ハンガリー等での ヒロシマ・ナガサキ 原爆展の開催

被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国際世論を醸成するため、広島市と長崎市は共同で、海外において「ヒロシマ・ナガサキ原爆展を開催しています。

平成二十九年度は、ハンガリーの首都ブダペスト市とモンテネグロのコトル市において、両国で初めて「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。展示内容は、ともに、動員学徒として作業中に被爆し、犠牲

となった中学生の焼けた水筒などの遺品や、佐々木禎子さんの折り鶴など、実物資料二十点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル三十点などです。

ブダペスト市の岩の病院・核の避難所博物館では、六月一日から十月三十一日まで開催し、市民や観光客など約九万人の来場がありました。

六月一日の開会式では、広島平和記念資料館の志賀賢治館長らによる挨拶の後、被爆体験証言者の梶本淑子さんが、地図や絵などで構成されたスライド資料を効果的に使用して被爆体験



開会式で被爆体験証言を行う梶本さん

証言を行いました。皆熱心に梶本さんの証言に聞き入っており、中には、目に涙を浮かべて話を聴いている方もいました。

コトル市にあるコトル文化センターでは、十一月十五日から三十日まで開催し、若い世代を中心に約千六百人の来場がありました。

来場者からは、「遺品を見て、原爆の恐ろしさを改めて認識できました」などの感想が寄せられ、核兵器廃絶や平和の尊さへの思いを深めていただくことができました。

十一月十五日には、コトル市内の高校で山本定男さんによる被爆体験証言が行われ、二百人以上の高校生が証言に耳を傾けました。

コトル市での原爆展終了後、再度、ブダペスト市の岩の病院・

核の避難所博物館に展示資料を戻し、平成三十年八月三十一日まで展示を行います。
(平和記念資料館 啓発課)

被爆体験伝承者等 派遣事業の実施 平成三十年から 被爆体験の伝承者 等を全国へ無料で 派遣します

被爆者から直接受け継いだ体験を語り継ぐ被爆体験伝承者や、被爆者の体験記を朗読する朗読ボランティアを、全国に無料で派遣する被爆体験伝承者等派遣事業を始めます。

従来、申込者が負担していた派遣に係る謝礼金、旅費を追悼平和祈念館が負担することで、国内外への派遣を推進し、被爆の実相を広く日本全国、諸外国に伝えることを目的とするものです。

国内派遣については、派遣申込みのあった全国(広島市を除く)の学校、自治体、その他の団体が行う平和学習等の場に被爆体験伝承者等を派遣し、被爆者から直接受け継いだ被爆体験などの講話や、被爆者が見つけた体験記や原爆詩の朗読を行い



被爆体験伝承講話

ます。

● 申込受付ー平成三十年三月一日より受け付けます。なお、申込数が上限に達しましたら受付を締め切ります。

● 派遣先の決定ー原則、受付順で決定します。

● 派遣開始ー平成三十年四月以降、順次派遣します。

※実施内容についての詳細は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館ホームページ(<http://www.hiro-tsuitokenkan.go.jp/>)に掲載しています。

※国外派遣については、派遣要望先を調整し、実施します。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

☎(082) 207・1202

県外・国外在住被爆者証言ビデオを収録しました

原爆死没者追悼平和祈念館では、国内（県外）や海外で生活されている被爆者の証言を収録しています。

今年度は、国内では、北海道（五人）、栃木県（一人）、埼玉県（二人）、千葉県（二人）、東京都（一人）、神奈川県（一人）在住の被爆者の証言を、海外では、韓国（三人）に加えて新たに米国（三人）在住の被爆者の証言を現地でも収録しました。

「似島へ行ったんですよ。…広島の方からどんどんどんどん機帆船がエンジンかけて来る



収録の様子

んですよ。そして近くにたたら、なんか鳴き声やら何やら、悲鳴やら聞こえるんですよ。そして、のぞいたらもう、人間ではないんですね」

「もう熱いからとにかく川に飛び込んだと。飛び込んで泳いで上がって、また熱いので、川にまた飛び込んで上がって来て、だからもうかなり顔ももうこんなふうにくれ上がってますし、大きくなってましたので、私はそれが、あの一緒に朝出かけた兄だっというのは全く分からなかったんですよ」

「防空ごうのふたを開けてみたら、中にね、もう何十人も入っているわけですよ。ところが全部人間が蒸し焼きになっているんですよ。その亡くなった人たちの形相は本当にいかに苦しんだかっていうふうだね、自分で胸をかきむしったり。それから壁の、昔の、一応コンクリートです。それに爪痕が付いているんですよ。むしったね。余りの苦し紛れのためにね」

「中学で言うところ一年生か二年生ぐらいの子どもが多いんですけど、全部服も破れて、裸で歩いている者もいるんですが、みんな皮がこう爪の線ですまったり、あごの線ですまったり。目は

よく見えてないだろうけど、みんな歩くんです。…中には、手首が飛んで、骨だけで。あとはまだしっかり肉体がついているのにそれで痛みを感じないで逃げていく子どももいるし」

これは、この度収録した証言の一部です。

この度新たに収録した米国在住日系人被爆者の証言においては、日本人でもあり米国人でもある日系人として日米二か国のはざまにおかれた境遇や心情についても語られています。

収録した映像は、編集後、館内及びホームページで公開するとともに、平和学習資料として貸出しをする予定です。

今後、国内・国外を問わず、貴重な被爆証言を少しでも多く収録し、後世に伝えていきたいと考えています。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

被爆体験記の執筆をお手伝いしています

原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆者の高齢化が進むなか、「被爆の記憶を体験記に残したいけど、自分ひとりでは文章にまとめられない」という方



職員による被爆者の方への聞き取り風景

秘めていた思い出したくない体験を初めて話される方も多く、特に若い世代に体験を伝え、二度と繰り返してはならないという強い使命感を持って、応募されています。

今回、執筆をお手伝いさせていただいた体験記から、普喜恵身子さんの体験記（抜粋）をご紹介します。

普喜さんは、十三歳の時に尾長町の自宅で被爆しました。

…練兵場の山裾を通って行きますと、東照宮や鶴羽根神社の辺りでは、やけどや負傷した兵隊さんがずらっと並べられていました。やけどで体が腫れ、軍服の金ボタンは全部はずれていました。爆風に飛ばされたのか、手と足を開いて座ったままの姿勢で、目をかっと見開き亡くなっている若い兵隊さんもいました。私は一瞬その人は生きていたのかと思いきょっとしました。兵隊さんだけでなく、軍馬も原爆で焼かれて、ひよろひよろと歩いていたり、倒れたりしていました。馬もかわいそうでした。

当時はどの家の前にもコンクリートの防火用水槽があって、水が張ってありましたが、その五〇から六〇センチメートル四

方の水槽に三、四人の人が顔を突っ込み、膝をついて止くなっていました。おそろしく、やけどでのがが濁き、水を飲むために水槽に入り、そのまま力尽きて息絶えたのでしょうか。そういう水槽をたくさん見ました。電柱はまだくすぶってポツポツと燃えています。

橋のたもとで亡くなっていた小さな子どもは、男の子だったと思うのですが、やけどで体が

風船のように膨れていました。また、防空壕のそばでは5歳くらいの子どもが亡くなっていました。だれも見てあげる人もなく、何か上に掛ける物もなく、放置されたままの状態、かわいそうでした。

やけどした人は、皮膚が剥がれ黒くなって、指先からぶらさがり、まるで幽霊のように歩いておられました。なぜそうなるのか分からなくて、「あれ、ど

本館下から発掘された資料を展示しています

平和記念資料館本館の耐震改修等工事に先立ち、埋蔵文化財保護のため、平成二十七年十一月から平成二十九年三月にかけて（公財）広島市文化財団によって本館下の発掘調査が行われました。この過程で発掘された資料はコンテナ約千箱に及び、文化財団が整理と分析を続けています。

これらの発掘された資料の中から、被爆当時の市民生活を偲ばせる資料と被爆後の



展示中の33点の資料

影響を知ることができる資料合わせて三十三点を選び、平和記念資料館東館一階無料スペースで展示しています。

【お問ひ合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

第二十二回 展示 検討会議の開催

うしたんかしら？」と思いた。……

当館では、この事業によるものを含め、現在、約十四万七千編の被爆体験記を公開しています。

（原爆死没者追悼平和祈念館）

平和記念資料館では現在、本館展示の更新を進めています。展示内容については、原爆被害、核や平和問題などの有識者で構成する展示検討会議の委員から、展示構成、展示手法などについて指導・助言を受けながら検討を行っています。

平成二十九年十一月七日に第二十二回展示検討会議を開催しました。前回の検討会議で意見のあった原爆の絵の実証性や展示方法をふまえ、「八月六日のヒロシマ」と「被爆者」のゾーンについて次のような内容を示し、意見を交わしました。

【八月六日のヒロシマ】

東館から渡り廊下を進んだ本館最初の展示は、原爆の絵から人の被害を撮影した写真に変更

し、本館のテーマである「人」、特に「個人」を来館者に感じてもらう展示とします。続いて原爆のさく裂の瞬間を描いた絵を展示します。来館者に「ピカッ」と光った瞬間を実感してもらい、原爆の絵がイメージではなく、被爆者の実体験に基づいて描かれた絵と分かるように、作者の言葉も合わせて展示します。

人の被害の集合展示では、原爆の絵と写真を集合し、傷つくと人々、変わり果てた姿という二つのテーマで構成することを考えています。原爆の絵では、炎に包まれ傷つき逃げ惑う様子や建物の下敷きとなり炎に包まれる人たちなど、写真には撮影されていない情景を伝えます。写真では、火傷を負った人、負傷した人、一人一人の被害を撮影した写真を展示します。原爆の絵で表現された色や情景と写真に写された被害の様子が補完し合い、当日の惨状を伝えます。原爆の絵には作者の言葉も添えます。

【被爆者】

今回の会議では新たに「被爆者」のゾーンの最後の展示イメージを示しました。進行方向

の右側の壁面に、発掘された遺骨の写真を大きく展示し、来館者に改めて亡くなった人々を意識してもらいながら、左側の壁面で被爆者やその家族の一人一人の想いを伝える写真を展示します。悲しみ、痛み、不安など、歳月を経ても消えない想いを伝えます。コーナーの最後の壁面には、被爆した母親と被爆後に生まれた子どもの写真を展示。新しい命が誕生したという希望と喜びの中にも、無事に育つだろうかという不安な気持ちを持っていくことを伝えます。

来館者は被爆者や家族の想いを抱えたまま東館へ向かいます。

今回の会議では、原爆の絵の展示方法について、現物資料や写真と合わせ当日の情景を伝える効果的な展示となっている、と委員から承認を受けました。本館の初めの写真や最後のコーナーの写真については、もう少し再検討しても良いのではないかと意見もあり、そうした意見をふまえ展示内容を固めていきます。

（平和記念資料館 学芸課）

平和記念資料館資料調査研究会 会員が研究 成果を発表

平成二十九年十一月二十五日（土）、平和記念資料館資料調査研究会の研究発表会が開催され、五人の研究者が発表しました。来場者は約八十人でした。

○石丸紀興会員（広島諸事・地域再生研究所代表）

「特別法「旧軍港市転換法」適用都市における都市政策の展開と課題」と題し、占領下の都市政策について報告しました。



会場の様子

爆発放射線医学研究所附属被ばく資料調査解析部助教）

「相原秀二資料と映像資料を活用した研究展開とアーカイブズ学的アプローチ」と題し、被爆直後の広島を撮影した相原秀二らの活動とその資料の重要性について報告しました。

○高妻洋成会員（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）

「広島平和記念資料館東館の展示環境について」と題し、東館の展示環境調査結果について報告しました。

○静間清会員（広島大学大学院工学研究院特任教授）

「広島原爆線量評価に果した被爆建造物および被爆資料の役割（その1）」と題し、被爆建造物の残留放射能の分析・測定結果について報告しました。

○水本和美会長（広島市立天学広島平和研究所副所長）

「最新の核をめぐる動向と論調」と題し、核兵器の状況を解説するとともに、自身の北朝鮮訪問について報告しました。

【お問い合わせ】
平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

平和記念資料館資料調査研究会 研究報告第十三号 を発行しました

平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第十三号を発行しました。

【執筆者と論文のテーマ】

◆佐渡紀子「通常兵器の役割と軍縮管理・軍縮・欧州における通常兵器の役割に着目して」

◆静間清「広島平和記念資料館所蔵の仁科土壤資料および黒い雨を浴びた衣類とフォールアウト雨域について」

◆松田弘「広島平和記念公園内に設置されている二つの野外彫刻について―本郷新△嵐の中の母子像▽と菊池一雄△原爆の子の像▽―」

◆水本和美「NPT再検討会議の失敗と変わらぬ被爆地の思い―2015年の核をめぐる動向と論調―」

希望者には先着百部を無償配布します。

【お問い合わせ】
平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

海外からの来訪者が 発信するメッセージ

平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したものを（仮訳）を掲載しています。

ポール・リチャード・ギヤラガー
／パチカン市国外務長官



今回の訪問に深く、心を打たれました。

世界平和への責任が強まってく様、祈念します。

今日の人類の気持ちにより、明日の子どもの未来が確かなものとなりますように。

（二〇一七年一月三十日）

ガルス・サハキャン／アルメニア共和国国民議会議長

広島平和記念資料館を訪問し、心を深く揺り動かされました。このような悲劇が繰り返される

のを防ぐ唯一の方法は、記憶を守り続けることです。この悲劇の犠牲者に哀悼の誠を捧げるとともに、このような悲劇が二度と繰り返されることがないよう祈ります。日本の人々の悲劇が忘れ去られることのないよう、記憶を守り、あらゆる努力をされているすべての方々に感謝します。



（二〇一七年二月一日）

チャールズ・フラナガン／アイルランド共和国外務・通商大臣



アイルランド国民を代表し、広島に立てたことを光栄に

思います。

一九四五年八月六日の悲劇は、二度と繰り返されてはなりません。

(二〇一七年二月二十七日)

シヒュフリート・ブラツケ／ベルギー王国下院議長



広島平和記念資料館を拝覧し、深い感銘を受けました。我々は二つのメッセージを胸に帰国します。

ベルギーの言葉で“Nooist meer oor log”。つまり、このような事は二度と起きてはならない。

そして、原子爆弾の脅威は完全に排除されなければならない。

(二〇一七年三月二日)

エドゥアルド・ウリバリ・ビルバオ／コスタリカ共和国前国連大

使

戦争悪の最たるものであるヒロシマは、人びとの忍耐と希望の象徴でもあります。感動しました！

(二〇一七年三月十日)



ハリッド・ヒラール・アル・マワリ／オマーン国諮問議会議長

(二〇一七年三月十日)



オマーン代表团と共に広島市と平和記念資料館を訪問できたことを、大変嬉しく思います。

この悲しく痛ましい出来事を決して忘れることなく、原爆の

被害と影響について学んだ事を活かし、平和の実現に向けて邁進します。

平和が世界に広まり、この世から戦争がなくなるよう、心より祈念します。

(二〇一七年三月十七日)

エギディウス・メイルナース／駐日リトアニア共和国大使



広島平和記念資料館を訪問し、原爆犠牲者の御霊に哀悼の意を捧げます。

世界に平和が広がりますように。

(二〇一七年四月十一日)

ヌルル・イスラム／バングラデシュ人民共和国海外居住者福利厚生・海外雇用省大臣

バングラデシュ政府を代表し、

広島で犠牲となった多くの人のびとの御霊に、哀悼の誠を捧げま

す。

広島を訪れる度に人びとは思い出すでしょう。戦争は、人類の文明の発展を根底から揺るがすものだということを。

癒やしがたい犠牲を生んだこの悲劇を心に留め、世界に平和を訴え続けましょう。

(二〇一七年四月二十一日)



モザメル・ハック／バングラデシュ人民共和国独立戦争省大臣

我々バングラデシュ使節団は、

二〇一七年四月二十五日に広島平和記念資料館を訪れました。

一九四五年八月六日の米国の攻撃がもたらした残酷な結果に大きな衝撃を受けました。

人間性を踏みにしり、被爆者を今も苦しめ続ける原爆を、我々は認めません。

日本の再興に敬意を表します。十名の政府関係者と、その四

人の配偶者を代表して。



リナス・リンケヴィチュス／リトアニア共和国外務大臣

(二〇一七年四月二十五日)



広島悲劇に深く心を揺さぶられました。

我々はこのような恐怖を二度と許してはなりません！

広島鐘が平和のために鳴りますように。

(二〇一七年五月七日)

JICAサロン

「余熱の会」シニア海外ボランティア@ブータン」

「東ティモールってどんな国?」青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」

広島国際会議場国際交流ラウンジを会場に、JICA中国との共催で、平成二十九年度JICAサロンを開催しました。

十月一日、今年度第二回目の

JICAサロン「余熱の会」シニア海外ボランティア@ブータン」では、シニア海外ボランティアとして二〇一五年から二年間、ブータンにて地方農村部の生活改善などに取り組まれた亀井目博さんにお話を伺いました。

ブータンは、数年前に国王夫妻が来日されるなど、日本とも親交が深い国です。そしてブータンといえば、物質的な豊かさよりも精神的な豊かさや自然の大切さを第一と捉え、「国民の幸福」の実現を目指す「GNH（国民総幸福量）」が有名です。しかし一方で、急速な近代化も進んでおり、従来の政策といかにバランスを取りながら発展し



「余熱の会～シニア海外ボランティア@ブータン～」より

ていくかが、今後のブータンの課題でもあると、亀井さんは説明されました。

また、ブータンの観光や日常の様子など、実際に滞在したからこそ伝えられる生きた情報を、分かりやすく紹介してくださいました。

十二月十七日開催の第三回目では「東ティモールってどんな国?」青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」と題して、二〇一五年から二年間、青年海外協力隊として東ティモールでコミュニティ開発に取り組みした川本隼也さんが、東ティモールのことやご自身の体験談を語ってくださいました。

東ティモールは、二〇〇二年



「東ティモールってどんな国?」青年海外協力隊が語る派遣国の魅力」より

に独立した若い国です。当時メディアで頻りに報道されていたこともあり、東ティモールといえば、独立紛争のイメージを持つ人も多いのではないのでしょうか。しかし、現在は政局が安定しており、東ティモールの人々は、長年の占領から解放され、決して豊かとは言えないけれど、自分たちの力で自分たちの暮らしができることに喜びを感じているとのことです。人々の明るさが印象的だったと、川本さんは仰っていました。

現在東ティモールで唯一の産業といえるのが、人口の四分の一が携わるコーヒー産業です。コーヒーの栽培に適した気候で、豆の栽培から収穫、精製ま

でのほとんどが手作業で行われており、品質の高い豆が生産されています。川本さんは豆の生産過程をスライドで説明し、それを聞きながら参加者は東ティモール産のコーヒーを試飲しました。

ほかにも言語、宗教、教育事情や人々の日常の様子など、普段あまり耳にする機会がない東ティモールのことを、深く知る貴重な時間となりました。

JICAサロンでお二人の実際の体験に基づくお話を聞き、世界はまだまだ新しい発見と驚きに満ちているのだと感じました。世界を知り、学ぶことのできる有意義な会でした。

(国際交流・協力課)

「姉妹・友好都市の日」記念イベント

市民が海外文化を堪能

広島市は海外の姉妹・友好都市提携六都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて、記念イベントを開催しています。

二〇〇三年からは、この事業を本財団が市から受託して実施し

ています。各イベントの進行役は、広島市が市民に委嘱したヒロシマ・メッセージャーが務めています。

重慶の日

昨年十月二十一日(土)、広島市留学生会館にて記念イベントを開催しました。主催「平成二十九年重慶の日実行委員会(日本中国友好協会広島支部や本財団など六団体で構成)

重慶市から贈られた菊の展示が来場者を迎え、その後来場者は、中華菓子の月餅と麻花、ウーロン茶を味わいました。

開会セレモニーでは、実行委員長、広島市長が挨拶され、重慶市長から届いたメッセージを披露しました。

続いて、ヒロシマ・メッセージャーの李辰瀟さんと劉静さんが重慶市の観光スポットや街の様子、独特の食文化等について写真を使って分かりやすく紹介し、中国語のミニ講座も行いました。

記念ステージでは、日本中国友好協会広島支部の皆さんによる太極拳が披露され、来場者も一緒に優雅でゆったりとした

太極拳の動きを体験しました。次に、アジア各地にて京劇や武術の修行を行ってきた団体、アジアンドラゴンによる中国伝統芸能の変面と武術演舞、南方獅子舞が披露され、会場は歓声が沸き大いに盛り上がりました。イベントの最後には、重慶市等から頂いた品々の抽選会を行いました。



アジアンドラゴンによる変面

約百三十人の来場者は、様々な文化の体験を通して、楽しみながら重慶市や中国への理解を深めていました。

ホノルルの日

昨年十一月十一日（土）、広島駅南口地下イベント広場で記念イベントを開催しました。主

催し平成二十九年度ホノルルの日実行委員会（広島日米協会や本財団など八団体で構成）

まず、来場者をフレーザーコーヒーとフルーツジュースでお迎えました。

オープニングは、古典的なフラ「カヒコ」で始まり、その後、実行委員長、広島市副市長、ヒデオによりホノルル市長が挨拶されました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーの畑井淳一さんと本石瑠さんが、会場の大型画面に写真を映しながらホノルル市における虹の神話や色の意味、日本文化について紹介しました。

次に、ハワイアンバンドとフラのステージが行われ、本格的な演奏と華やかなフラの演舞により、会場はハワイの南国ムードに包まれました。

最後には、来場者も一緒に全員で「愛するハワイ」を合唱し、ハワイの雰囲気を感じてもらいました。

会場内では、ハワイアングッズの展示販売やリボンレイの制作体験もあり、約五百人の市民が、ホノルル市について楽しみながら理解を深めていました。



華やかなフラのステージ

2017 国際フェスタ

（国際交流・協力課）

平成二十九年十一月十九日（日）、広島国際会議場、平和大通り緑地帯などを会場に開催されたこのイベントは、今回で十八回目を迎えました。

広島市や近郊で国際交流・国際協力活動をしている市民団体や企業六十五団体が、異文化理解や地球環境、多文化共生、日本文化体験など三十八の多彩な事業を催し、過去最高の延べ約一万五百人が来場しました。

参加した外国人も日本人も、世界各国の文化に触れる一日となりました。（主催ー本財団。共催ー独立行政法人国際協力機構中国国際センター、公益財団法人ひろしま国際センター、広島市）

トークショー「教えてポビー！ ナイジェリアってどんなところ？」

ゲストスピーカーにタレントでナイジェリア出身のポビー・オロゴンさんをお招きし、ナイジェリアの暮らしや、ナイジェリアでのスポーツが果たす役割について語っていただきました。

会場はあっという間に満席となり、ユーモアたっぷりのトークは最後まで会場を沸かせていました。トークショーの参加者からは、「軽快なトークが面白かった。」「これまでよりナイジェリアを身近に感じることができた。」といった感想が寄せられました。

国際交流・協力活動の紹介

市民団体等活動紹介コーナーでは十六団体がブースを設け、

それぞれの国際交流・協力活動について紹介しました。このほかにも、公的団体やNGO、大学生、企業などがブースを設け、参加者は、展示を見て質問したり、民族衣装を着たり、クイズに参加するなど、楽しく交流しました。また、青少年や大学生などによる国際交流・協力活動の発表や報告会、外国語のおはなし会も行われました。



外国語のおはなし会の様子

外国文化・日本文化の紹介と体験

外国文化の体験では、スコットランドに伝わるキルトのデザイン作りや中国の切り絵体験、中国結び（中国式組み紐）体験コーナーを催し、日本伝統文化

の体験では、着物の着付けや茶道、いけばな、書道などのコーナーを催しました。外国人も日本人も、各国の文化を直接体験し、それぞれの素晴らしさに触



日本文化体験(茶道)

れました。

世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、「ひろしま国際村世界の屋台」と称し、十六団体が世界の様々な料理の屋台を出店しました。また、「国際協力バザー」会場も十一団体が参加し、各国の民芸品などを販売しました。

このほか、イベント会場を回ってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリー

や、大人から子どもまで異文化体験を楽しめる地球ひろば、クラフト体験をしながら広島市の姉妹・友好都市について学べるコーナー、世界の舞踏や音楽を披露する屋外ステージ、外国人のためのVISA無料相談コーナー、広島市内にある日本語教室を紹介する展示コーナー、世界のコインを寄贈し開発途上国の子どもたちを支援するコーナーなど、各会場は大いに賑わい、参加者は、国際交流・国際協力について、見識を深めていました。

また、このイベントには、多くの市民や留学生がボランティアスタッフとして参加し、一緒に盛り上げていただきました。

(国際交流・協力課)

「姉妹・友好都市の日」記念イベントで活躍 ヒロシマ・メッセンジャー決定

広島市は、海外の六姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を定め、各都市との交流の拡大と友好親善の促進を図っ

【活動依頼期間 本年1月1日～12月31日】

ホノルル市	畑井 淳一 (はたい じゅんいち)	栗栖 雅子 (くりす まさこ)
ボルゴグラード市	藤岡 弘一 (ふじおか ひろかず)	ナターリア ガリヤシン
ハノーバー市	ダニエル ラーベ	白井 佳奈 (しらい かな)
重慶市	李 汶霖 (リ ブンリン)	常 虹 (ジョウ コウ)
大邱広域市	川内 望愛 (かわうち のあ)	谷川 穂乃果 (たにかわ ほのか)
モントリオール市	大崎 宏予 (おおさき ひろよ)	倉橋 智子 (くらはし ともこ)

ており、都市ごとに各二人、計十二人をヒロシマ・メッセンジャーとして委嘱しています。メッセンジャーは、二〇一八年の「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画・立案への参画、司会進行を行うなど、姉妹・友好都市について市民の理解を深める活動に携わります。

(国際交流・協力課)

「ひろしま留学生基金」にご協力を

本財団では外国人私費留学生

平和記念資料館 資料館全館オープン延期について

平和記念資料館は、平成三十年七月ごろの全館オープンを目指し、昨年四月から、本館の展示内容の更新のための改修工事及び耐震工事を行ってきましたが、耐震改修工事スケジュールの見直しに

より、平成三十一年春(予定)まで全館オープンを延期することとなりました。本館閉館中は、引き続き、東館一階のフリースペースで本館で展示していた資料の一部を展示します。

工事期間中は、ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力の程よろしく願います。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(0882)241-4004

☎730-0811

広島市中区中島町一番五号(広島国際会議場三階)
☎(0882)242-8879

「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和六十三年度に事業を開始し、現在では毎年三十人に月額三万円を支給しています。

基金へのご寄附に関するお問い合わせ

(公財) 広島平和文化センター
国際部国際交流・協力課